

浪江の



# こころ通信

・第38号・

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

## 再取材シリーズ

### 再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第38号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地  
「浪江のこころ通信」宛  
FAX.0243(22)4218





## 小川 和男さん・セイさん(川添)

取材者：地域社会デザイン・ラボ 中島  
取材日：7月7日

### 帰れるものならば浪江に帰りたい

お子さんの独立後、ご夫婦で穏やかに過ごしていた小川和男さん(86歳)とセイさん(83歳)。2011年3月末に二人の娘さんが住む神奈川県横浜市に避難し、現在は市内の賃貸住宅で暮らしています。和男さんは将棋を、セイさんはお友達との交流を楽しみ、故郷から離れて暮らす寂しさを紛らわせていると言います。



▲横浜市のマンションにて、小川和男さん・セイさん夫妻

**■和男さんのお話**  
私は浪江生まれの浪江育ち。83年間浪江で暮らし、定年後は畑仕事を楽しんでいました。悪夢のようなあの日のことは忘れようにも忘れられません。震災当日は家が倒れるかと思うほどの大揺れで、電話も電気も切れてしまい情報が得られないまま不安な夜を過ごしました。翌朝は防災無線の呼びかけで津島地区に向かおうとしましたが、大渋滞で車が動かず、小高地区の親戚宅に避難しました。ところが夕方、車に分乗してきた近所のご一家が「ここは危ない。至急、うちの車さ乗りなさい」と。それで相馬市に避難し、「フローラ」という結婚式場の控え室をお借りして4日間過ごしました。その後、「フローラ」の方から再度の避難を勧められ、宮城県内の2か所の施設を転々となりました。そうこうするうちに横浜に住む娘が迎えに来てくれて、雪とガソリン不足に難儀しながら横浜に着きました。現在の住まいは7回目の避難先で、住宅供給公社の賃貸マンションです。部屋が狭いのが難ですが、腰を痛めた私にとってはエレベーター付きなので助かっています。

**■セイさんのお話**  
結婚して以来60年間浪江で暮らし、近所の方とお茶のみするのが日々の楽しみでした。気候も温暖で自然に恵まれた土地です。お盆と正月には帰って来て賑やかに過ごす。そんな当たり前の暮らしが、震災で一気に変わりました。避難先で過ごす日々は、着の身着のまま避難したんです。その後、娘に送られてきた品もほとんど持ち出せず、本当に悲しかったです。震災後1年ほどは、お医者さんが処方してくれた睡眠薬なしには眠れませんでした。今はようやく横浜で暮らすに慣れ、それなりに元気に暮らしています。同じマンションにお茶に誘ってくださるお友達ができたのはありがたいことで、特に東北や北関東出身の方とは気兼ねなく話せますね。私と同様、浪江町から横浜に避難した方とも親しくなり、しょっちゅう行き来したり一緒に健康体操の教室に通ったりしています。新しいご縁はできましたが、浪江町で親しくしていた方と会えないのは辛いです。どうかお元気でいらしてください。



## 枘谷 拓郎さん(権現堂)

取材者：浪江町役場 舛田・嶋原・中川  
取材日：6月30日

### “Now or never” 今やれることは、一生懸命やろう

さわやかな明るい笑顔の枘谷さんは、日本DMAT\*の資格を持つ看護師さんです。お世話になった方々へ、今度は自分が恩返しをしたいという気持ちを強く持っていらっしゃいます。震災により、たくさんの友人と離ればなれになってしまったことで、あらためて友人の大切さが実感できたとおっしゃいます。



▲さわやかな明るい笑顔の枘谷さん

震災当日は、夜勤明けで自宅にいました。家族の安否を確認した後、町の状況を見て職場が大変なことになっているだろうと考へて、すぐに南相馬市立総合病院に向かいました。津波被害に遭われた方や家屋で怪我をされた方を救命していく状況で、そのまま3日間泊まり込みました。14日に職員へ避難命令が出たため、山形に1週間避難しましたが、病院業務を再開することになり南相馬市のアパートで暮らすことに決めて仕事を続けました。その頃、新潟や山形のDMATが来て病院支援をしてくれました。DMATは、

多くの患者さんを少ない医療資源で救命していく医療チームです。私も研修を受けていたので、様々な人たちの役に立ちたいと思い、その後、日本DMATの資格を取りました。今度は自分が、お世話になった人たちに恩返しをしていく立場だと思っています。震災の年の5月に、避難者の健康状態をみるために1か月間、新潟県長岡市に派遣されたことがあります。その時、協力してくれた方が、「仕事だけを休めるのは大切だよ」と、声を掛けてくれて、自分の気持ちを助けてもらったことが心に残っています。また、仕事だけでなく、所属していたソフトボールチーム代表の避難先だったご縁で、山形県東置賜郡高島町の総合体育祭・ソフトボール大会で、仲間と久しぶりに集まり浪江町チームとしてソフトボールができたのはすごく良かったことです。参加させてもらって、温かく迎えてくれた高島の方々に感謝しています。毎年の大会が楽しみです。これからも交流が続いてほしいなと思います。お世話になった方

▲ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」のチームTシャツのロゴ

に、物や形でなくても、参加して盛り上げていくことで恩返しをしたいと思っています。大学生の時は東京に住んでいましたが、卒業後は浪江町に戻りました。浪江町は海も山もあり、家族も気心の知れた友人もいたもので、都会と比べて不便は感じませんでしたが、避難指示が解除されても、簡単には帰れないかもしれませんが、31年育った町なのでみんなと集まって「久しぶり！」と言いたいです。震災前は、当たり前だと思っていた日常生活でしたが、親しい人が亡くなって、明日がいつも通りあるかわからないことを知り、1日1日を楽しく生きようと思っています。

ソフトボールチーム「浪江大吉SSB」のチームTシャツにあるNow or neverのロゴがあり、「今は今しかないのだから、今やれることは一生懸命やろう」と思っています。皆さんに、そう伝えたいです。

\*DMAT：災害時に被災地に迅速に駆けつけ、救急治療を行うための専門的な訓練を受けた医療チーム



## 西 康至さん(立野)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：7月11日

### 今も元気に

西さんは妻シオさんと息子の貞治郎さん、久美子さん夫婦と4人で、福島市笹谷の借上げ住宅で暮らしていらっしゃる。

今回の取材では、康至さんのお話を貞治郎さんが補足してくださったり、剣道の資料を見せてくださったり、父子お二人からお話を伺うことができました。病後のリハビリをされているシオさんの一日も早い回復と、腰痛が辛そうな久美子さんの痛みが少しでも楽になられるといいですね。



▲家族4人、全員勢揃いで。  
(左からシオさん、貞治郎さん、康至さん、久美子さん)

大地震があった3月11日は、庭の掃除などをしておりました。突然の激しい揺れに、思わずしゃがみ込みました。屋根の瓦は落ち、家の中では冷蔵庫が跳ね上がった、びっくりしました。酪農をやっていたので、牛舎の中で牛が吠えるように啼いていたのを覚えています。

私たちは親子3代夫婦とひ孫2人の8人で暮らしておりまして。直ぐに停電になり、水も使えなくなり、地域の酪農家と発電機を持ち回りで使っておりましたが、原発が危ないということで、家族全員で逃げましたが、

残された牛たちはどんな気持ちでいたのか、胸が詰まる思いでした。

南相馬市の馬事公苑にその2日後、避難しました。その後、市が用意したバスで、伊達市の梁川体育館に移動しました。雪は降る、断水になる、余震はある、お世話してくれた方々は大変だったろうと思います。ここで家族は一旦それぞれ離れることになりました。その後、猪苗代に移り4か月お世話になり、7月下旬に酪農家の友人の紹介で、現在の家に落ち着きました。

息子の話によると、「最初の一時帰宅の時はどこも草ボーボー。牛舎には苦しんだであろう牛たちが骨になって迎えてくれた。水を求めて側溝に落ちた牛の死体。あまりにも酷い光景だった」とのことでした。牛も家族の一員です。原発事故さえなかったらと思うと、怒りと悔しさで：忘れられません。また避難中は、津波で家族や家を失った方々のことを思えば、牛のことなど、とても話せませんでした。

私は、30代の時に神経性の病に罹り、3年間農業を休みましたが、剣道をするることによって

病気を克服し、その後剣道7段教士を頂き、体に自信を取り戻すことができました。荻野剣道スポーツ少年団では、若い先生方と一緒に子どもたちと稽古に励み、汗を流すのが楽しみでした。

震災の1週間前、3月6日には第25回牛乳杯争奪少年剣道大会が開催されましたが、これが一区切りとなってしまい、大変残念です。各地にそれぞれ避難されましたが、その年の7月、白河で行われた中体連では、浪江町や双葉郡内の方々にお会いすることができ、大変嬉しい時間でした。

避難して3年が経ちましたが、家の近くには浪江の仮設住宅もありますので、何かと心強く思っています。また、孫やひ孫がお盆や正月にここに来る時は、とても賑やかに、楽しみます。

スポ少や各種剣道大会を見学に行ったりは刺激を貰い、リハビリのつもりで竹刀の素振りや毎日しております。高齢なので病院が近いことも精神安定剤のようになっています。なるようにしかならないので、今を元気に生きたいと思えます。



## 山田 正博さん(大堀)

取材者：茨城県駐在浪江町復興支援員 石田・大山・田中・八橋  
取材日：6月25日

### 伝統工芸の技術を後世へ伝えるために・・・

浪江では、伝統工芸品の「大堀相馬焼」を作っていた山田さん。現在は、茨城県つくば市に避難しながら福島県矢吹町に工房を構え、忙しい毎日を送っています。



▲現在の山田さん



▲年末に集まった山田さん家族

■**当時を振り返って**

地震発生時は、町内のホームセンターにいました。家族と工房が心配になり急いで戻ってみると、自宅と家族は大丈夫でしたが、工房の中は足の踏み場もないくらい滅茶苦茶になっていて、手が付けられない状態でした。当然、作品も全て壊れてしまっていました。翌日から家族と親戚10人で県内外を転々とし、平成24年12月に茨城県つくば市に一旦落ち着くことができました。

■**伝統を守って**

震災後、何もすることがなく体を持って余っていたところ、「何とか伝統を守っていたいかなければならない」と思い、以前からの知り合いを通じて矢吹町の工房を開くことを決めました。しかし、その工房は仮設的な建物なので耐久性もなく契約期間も5年のため、その後続けていくには「また、ゼロからスタートしなければならぬ時が来るんだな」と考えると不安になります。

また、震災前一緒に仕事をし

■**仲間と共に**

いろんなことが落ち着きはじめたので、今年6月に友人3人と鮎釣りに行くことができ、久しぶりに釣り仲間と会えて嬉しかったです。また、矢吹町の工房とつくば市の借上げ住宅を行き来するといった忙しい毎日を送っていますが、つくば市に避難している近所の方々や浪江町の思い出話をしながら、月に一度呑み会をするのが何よりも楽しみです。

■**息子を現在、東京で陶芸教室の講師をしており、それが本格的になってしまつたら、一緒にできなくなってしまうのではないかと思います。震災前の暮らしを思い出すと寂しい気持ちになります。**

しかし、伝統工芸の技術の後世につなぐために、強い気持ちを持って、自分ができることを精一杯やっていきたいと思っています。今の頑張りが今後100年、1000年と受け継がれていくことを願っています。



## 高野 康幸さん(請戸)

取材者：NPO法人山形の公益活動を応援する会・アミル 柴田  
取材日：7月2日

### 浪江でのつながりも、山形でのつながりにも感謝しながら暮らしています

浪江のこころ通信第19号に掲載された高野さんご家族は、現在も3人で山形県中山町の借上げアパートで暮らしています。母・タキ子さん、康幸さんサダ子さんご夫妻、それに近くに住んでいる娘・博美さんご家族と支え合いながら生活しています。大好きな山野草を育て咲かせることがなよりの楽しみだそうです。



▲「ウチョウラン」がきれいに咲きました。  
高野さんご家族(左：サダ子さん、中央：タキ子さん、右：康幸さん)

今年南相馬が相馬に引っ越そうかと考えていましたが、娘に「あと3年は近くにいてもらえないか」と頼まれて、もう少ししばらく中山町にすることにしました。ここに一緒に逃げた時から孫たちが大きくなるまでは近くにいたいと思っています。孫の翔は山形の高校に入学し、部活動の野球も本当によく頑張っています。私も朝5時半にグラウンドまで送り届けたり夜遅く迎えに行ったり。妹の稜もバスケットボールを始め、父親母親も仕事にPTAにと忙しいよう

です。母は今年94歳になりましたが、どこも悪い所痛い所がなく体に変わりなく安心して暮らしています。藤は花芽も持つていて当時とても元気づけられました。ですがその後、木は跡形もなくなくなりました。先日記宅した際、土地の上には大きなコンクリートが移動されていました。自宅の姿形はなくなってしまいましたが、自分の土地には変わらず、大切にきてきた想い出があり、荒れていく土地を見ると憤りをどこに向けたらいいのか分からない時もあります。今も浪江町には必ず春、お盆、秋と墓参りに帰っています。地区によっては、車の中でも線量計の警報が鳴る場所もあり、線量が高い場所もあるということを実感する時もありました。先日、集団移転の意見交換会に参加し説明を聞きまし

が、住む場合生活に欠かせない車が列をなし、荷物を抱えて歩く人も大勢いました。本当に見たことのない光景でした。15日には全町避難が決まり、津島の混雑は無くなりました。妻と娘は福島市の妻の実家に一足先に避難し、私は翌日まで地区の人たちに声をかけてから合流しました。4月になると就職した娘のアパートに移り、翌年5月には、私の定年退職と時期を同じくして娘が原ノ町に転職し、一緒に移動しました。■我が家のように感じつつある白沢の家と、つながり始めた地域の縁を大切にしたいその後、友人の紹介でこの白沢の借上げ住宅で2011年11月末から暮らし始めました。最低限の家財は津島から持ち込みましたし、本当に恵まれていましたね。近所の方々も本当によくしてくださり、先日は地域の方々とお伊勢参りに行ってき



## 今野 秀則さん(下津島)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山  
取材日：7月9日

### 人がつながって生きていくことや、ふるさとの祭、伝統芸能。そういった全てが断ち切られたことが、悔しくてなりません。

震災当時、今野さんは(社福)福島県社会福祉協議会に勤務され、同時に下津島地区の行政区長さんも務めておられました。その今野さんは、地区の人々16人から聞き取った被災の記録『3.11ある被災地の記録 浪江町津島地区のこれまで、あのとき、そしてこれから』を上梓され、読売新聞(2014年7月6日福島版)などに大きく取り上げられました。

今回は、奥さまの芳子さんと共に「聞かれる側」になっていただき、震災当日から今日までのこと、ご近所や地域での交流など、さまざまなお話を伺いました。

■私は福島市の仕事場で、妻と娘は外出先の原ノ町で、大震災に遭いました。物凄い揺れに、立って歩けないほどでしたが、机上のパソコンを手で押さえながら収まるのを待ちました。職員と共に外へ避難したものの、歯の根も合わないほど寒かったし、極度の緊張もしていました。頻りに余震があり、その度に駐車場の車が大きく揺れました。急いで家族に連絡を取りましたが、自宅にも子どもたちにもつながらず、そのうちようやく娘からメールが来て無事を知りました。芳子さんによると「原ノ町でも大きな揺れだったので、原浪トンネルを避けて山麓線で帰ろうとしたけれど、馬事公苑の辺りでこの先は通行できないと言



▲仲睦まじく、素敵な笑顔を見せてくださった秀則さんと芳子さん。芳子さんは避難後、いろいろな会に参加するなど、ご自分の趣味を楽しむ時間が増えたそうです。

われしました。国道6号に出ようとしたが、思い返して原浪トンネル経由で戻りました。あのまま走っていたら津波に遭っていたかもしれせん。今思うと、本当に怖いのです。原ノ町は多くの家の瓦が落ち、大変なことになるってました。■翌日から4日間、津島は人と車で溢れていました。12日早朝、町から大勢の町民が津島に避難をするので地区の集会所で受け入れをして欲しいとの要請があり、役員の方々とその準備に追われました。また、我が家は元々旅館と煙草の小売を営んでおり、幾世橋の恩師家族をお泊めしたり、煙草を売ったりしていました。津島の人口は1,400人程ですから、7倍を超す1万人以上が避難して来たと思います。小中学校のグラウンドから溢れた車が路肩に駐車。その間を進もうとする

下津島では他の地域で新たな生活を始める人たちが増えていきます。私たちもこれからの行く末を真剣に考えたいと思っていますが、仮設・借上げ住宅の延長期間も定かではなく、帰町の目途も立たない中で、何をしようか、根を下ろした生活と、気持ちの整理が必要で